

「戦時下における児童文化」について（その七）

——「東日小学生新聞」の「紙上作品展覧会」における位相と展開（七）——

熊 木 哲

前稿へ「戦時下における児童文化」について（その六）の「大妻女子大
学紀要・文系」第三十三号、二〇〇一・三）では、「東日小学生新聞」の
「紙上作品展覧会」における位相と展開に関して、昭和十四年（一九
三九）の第二四半期（四月～六月）を検討してきた。

昭和十四年第二四半期における作品展覧会は、直前期である十四年第
一四半期と比較してみると、日曜日に掲載された「紙上作品展覧会」
（以下、「欄」）の設定は直前期である十四年第一四半期と同様の二回で
あり、「欄」を含めた第二四半期全体での掲載作品数においても多少
の増減は見られるものの各ジャンルともほぼ同様であり、特筆すべき
差異は見られなかった。

検討対象の十三回の日曜日にあって、「欄」の設定は僅かに二回で
あり、作品の掲載さえもない週が第一四半期では三回であったが、第
二四半期では四回であった。こうした「欄」の設定のみならず作品の
掲載さえもない編集意図については、前稿でも推測したように、平日
における作品掲載が定着し、日曜日毎に「欄」を設定したり、殊更、
日曜日だからといって作品を掲載することがなくなったのであろう。

第二四半期をジャンル別に概括しておく。

「綴方」の日曜日掲載作品は、合計八作品。作品題名には「戦時
下」を思わせるものはなかった。内容的にも「戦時下」故の作品はこ
れらの中には見当たらなかったが、「越道に行つた事」という作品の

背景に「兎報国」の時局を推定してみた。平日掲載の「綴方」は、五
五作品。このうち、「戦時下」を内容とすると考えられるものは一四作
品。約四作品に一本の割合であり、数的にも決して少ないのみな
らず、遺骨迎えの「英霊」や「兄さんの出征」といった投稿児童に
とっての「戦時下」があった。

「詩」の日曜掲載作品は、一六作品。このうち、時局柄を反映した
もは、「ぬこつむかへ」一作品のみであり、それ以外は児童の日常的な
身辺風景が作品内容となっていた。第一四半期での掲載数一七作品に
も「戦時下」色の濃い作品は一作品であり、この第二四半期での
「詩」作品の日曜掲載作品は同様の展開を見せたといえよう。「詩」の
日曜日以外の掲載作品は、七四作品。このうち、「戦時下」が作品の背
景となっていると考えられるのは、三作品だが、何れも深刻な内容で
はなかった。

「短歌」の日曜日掲載作品は、第一四半期には十一首であったが、
この第二四半期は僅かに七首。しかし、僅か七首のうち、「戦時下」を
内容とする作品は四首であり、掲載数の半ばを超えていることにな
る。平日掲載作品数は三三作品。このうち、「戦時下」が作品の背景と
なっていると考えられるのは、八作品。出征——戦場——帰還（遺骨
或は傷兵）という兵士にとって一連のステージが現われていた。昭和
十四年第一四半期には「出征」風景は見られたが、遺骨迎えはなかつ

た。しかし、この第二四半期には兄の遺骨での「凱旋」が詠まれるところとなった。また、第二四半期の日曜・平日を合せた掲載数四〇のうち「戦時下」を内容とするものは一作品。掲載数からはかなりの比率であった。

「俳句」の日曜日掲載作品は一二句。この内、「戦時下」を内容とするのは、二句のみで、他は児童の見た身辺詠とでもいふべき作品。「俳句」の平日掲載作品は、八二句。このうち、「戦時下」が作品の背景となっていると考えられるのは、五作品。日曜掲載作品同様に、遺骨迎えなどのような深刻な作品は見られなかった。また、日曜・平日を合せた掲載作品九四作品中、何等かの「戦時下」色がある作品は、七作品に留まっている。

「書方」で日曜に掲載された作品は、三七点。字句において、「戦時下」を思わせるものは、「天皇旗最敬礼」の一作品のみ。平日に掲載された作品は、一八五作品。平日に掲載された作品で時局を反映したと思われる字句は、「銃後國民協力一致」と「戦争軍旗大砲」がそれぞれ一作品、「天皇旗最敬礼」が三作品（日曜掲載と合せると四作品）が掲載されたにすぎない。第二四半期、日曜と平日掲載作品の合計は二二二作品に上り、第一四半期での掲載数（一七八作品）を大幅に超えたが、時局柄の字句を作品とした割合は多くはなく、第一四半期同様「戦時下」故の傾向は顕著ではなかったといえよう。

「図画」で日曜日に掲載された作品は、合計一三作品。このうち絵柄に時局を思わせるものは、「戦車」を描いた三年生の一作品のみ。平日に掲載された「図画」は、五七作品。このうち、時局柄と推察される絵柄には、傷病兵を描いた作品、出征の壮行会風景を描いた作品、戦艦と旭日旗と水兵を描いた作品、飛行兵を描いた作品の、合計四作品にすぎない。第二四半期、「図画」も、多くは児童の生活風景にある絵柄であり、「戦時下」故の作品は多くはなかった。

このように、昭和十四年第二四半期においては、「詩」「俳句」「書方」「図画」の作品には比較的「戦時下」色は薄かったといえるが、

「綴方」と「短歌」においては、「戦時下」色ははっきりとしていた。以下、本稿では、昭和十四年の第三四半期（七月～九月）の検討を試みる。引用に際しては、「書方」を除き旧字体を新字体に改めた。なお、在籍校名は原則として掲載によった。在学年次のうち「高一」「高二」は高等科一年、二年を示す。また、投稿者氏名は省略し、性別を記すにとどめた。

一 昭和十四年第三四半期の展開

第三四半期、七、八、九月を併せて検討するが、第三四半期の検討対象である日曜日は七月二日から九月二十四日までの十三回。第二四半期と同様であるが、「欄」の設定は、第二四半期が二回であったのに対し、第三四半期では四回。なお、「欄」の見出しは「紙上作品展覧会」で統一されている。

「欄」の紙面構成については、四回共、それぞれ全面掲載。なお、この他の日曜日には、掲載が無かった日曜はなかったものの、総てのジャンルを合計しても、掲載が一作品の場合が一回、二作品の場合が四回あった。

さて、「欄」の設定では、確かに四半期に四回であり、同年第一、第二四半期に比較すれば倍増となるが、検討に際しての対象作品数としては多くはないので、以下では、「欄」の設定されなかった日曜日に加えて、平日に掲載された作品も併せて検討する。

作品のジャンル別の掲載事情を確認しておく。
昭和十四年第三四半期は、七月一日（土）～九月三十日（土）の七九日分。

掲載状態は、休刊の月曜を除き、火曜日から日曜日まで、「綴方」「詩」「短歌」「俳句」「書方」「図画」の総てかその一部が掲載されていたことは、これまでと同様。なお、休刊の月曜以外で、作品の掲載が見えないのは、七月一日（土）の一日のみであった。

「綴方」の掲載数は七八作品。十四年第一四半期には七〇、第二四半期には六三作品であったから、十四年では最も多い掲載であった。

「詩」の掲載数は八〇作品。十四年第一四半期には九五、第二四半期には九〇作品であったから、十四年では最も少ない掲載となった。

「短歌」の掲載数は二九作品。十四年第一四半期には三七、第二四半期には四〇作品であったから、十四年では最も少ない掲載となった。

「俳句」の掲載数は七一作品。十四年第一四半期には九四、第二四半期も九四作品であったから、十四年では最も少ない掲載となった。

「書方」の掲載数は三〇〇作品。十四年第一四半期には二二二、第二四半期には二二二作品であり、十四年では最も多い掲載となった。

「図画」の掲載数は一〇〇作品。十四年第一四半期には八二、第二四半期には七二作品であったから、十四年では最も多い掲載となった。

以上のように、この年第一、第二四半期に対して第三四半期では「詩」「短歌」「俳句」の掲載は減少したものの、「綴方」「書方」「図画」では大幅な増加となった。

以下では、ジャンル別の検討を行う。

なお、これまでの検討では、「欄」及び日曜日に掲載された作品と平日に掲載された作品との分けて検討していたが、日曜の掲載が減少したことにより分けて比較検討することの必然性がなくなってしまう、以下、各ジャンルとも一括して検討することとする。

二 昭和十四年第三四半期における「綴方」

「綴方」の作品掲載数は、七八作品。第一四半期が七〇、第二四半期が六三作品であり、十四年度では最も多くが掲載され、計算上は、ほぼ毎日一作品が掲載されたことになる。

掲載された七八作品のうち、作品内容に、戦時下色の見えるのは次

の八作品。因みに、第一四半期では八作品であり、第二四半期では一四作品。

「のもん袋」

(東京市池袋第三校四年男子、七月十六日・日、第八七七号)

「愛国童話会」

(北海道上砂川鶉校五年男子、七月二十日・木、第八八〇号)

「兵隊さんへ」

(埼玉県馬室校三年男子、七月二十三日・日、第八八三号)

「軍神のお話」

(北海道幾春別校六年女子、八月一日・火、第八九〇号)

「出征軍人」

(横浜市神奈川校四年女子、九月八日・金、第九二三号)

「子兔の死」

(北海道月浦校六年女子、九月十日・日、第九二五号)

「連隊生活」

(横須賀市鶴久保校四年女子、九月十五日・金、第九二九号)

「興亜奉公日の朝」

(八王子市第四校六年男子、九月二十六日・火、第九三八号)

「のもん袋」(東京市池袋第三校四年男子、七月十六日)は、次のような作品。

昨日お母さんが、何かたくさん入った重さうなふろしき包をかかえて帰つて来た。僕は太急ぎで机の上でそれをひらいて見た。僕の好きな落花生や歯ブラシ、歯みがき、耳かき、日の丸扇子、落語の本や、その外いろんな物がたくさん入つてゐて、一ばん下にのもん袋と書いてある白い袋を発見した。(略)

お母さんは何かおくる物をさがしてゐた。僕も何かやらうと思

つて、机の引出しから国技館で買ったプロマイドを出して来た。(略)

戦地の兵隊に送られる慰問袋を作る様子がわかる作品。既製品の慰問袋に、それぞれの家庭の品物を加えて入れたようである。「僕」は、力士の写真をおくりにした。机の引出しに大事に仕舞っておいた宝物であろう。「日の丸扇子」への寄せ書きには「支那の地にひるがえる日の御旗」と書いた。

「愛国童話会」(北海道上砂川鶴校五年男子、七月二十日)と「軍神のお話」(北海道幾春別校六年女子、八月一日)の二つは、共に、「西住戦車長童話会」を聞かされた児童の作品。前者の童話会は、六月二十二日、後者は同二十四日に、それぞれの小学校を会場に開催された。

「西住戦車長」に関する作品としては、既に、第二四半期の「俳句」に、「西住は戦車の中で靖国へ」(北海道黒松内校高二男子、五月十九日・第八七二号)があり、前稿(その六)では、次のように述べておいた。

「西住は戦車の中で靖国へ」の「西住」は、「昭和の軍神」西住小次郎大尉のこと。前稿において、昭和十四年の第一四半期、「東日小学生新聞」では、一種の「昭和の軍神」キャンペーンとでもいえる紙面構成が見られることを確認したが、この第三句の背景には、「東日小学生新聞」に連載された「少年物語 西住戦車長」(三月八日～四月十一日、全三〇回)の存在が推測できようか。

ところで、「軍神西住戦車展」は、前稿で述べたように、第一四半期、十四年一月七日の靖国神社から始まり、三月には上野松坂屋で開催されていた。第二四半期では、四月には九日から二十日まで谷津遊園地で開かれた。一方、「西住戦車長童話会」は、群馬

県桐生市(一月二十六、七日)、東京日暮里第四校(二月十日)、新潟市(二月十六日～二十日)での開催案内や開催記事が「東日小学生新聞」に掲載された。この「童話会」は、北海道でも六月一日の札幌市内の小学校を皮切りに、五日小樽市のほか、十二日～十六日、二十一日～二十七日にかけて、北海道各地の小学校で開かれた。主催は東日小学生新聞、講師は、何れも「東日小学生」記者 渡辺善房先生。「東日小学生新聞」の「昭和の軍神」キャンペーンの一環であったと考えられよう。

ここでいう「前稿」は「その五」であるが、ここでは、昭和十四年一月からの「昭和の軍神」キャンペーンの内容として、西住大尉の乗っていた戦車の展示会や「軍神のお母さんから小学生の皆様へ」とする記事、北原白秋「西住戦車長の歌」や西条八十「昭和の軍神」を始め、「西住神社」の建立や銅像を建てるという記事など、多彩なキャンペーンの様相が見られたことを記しておいた。

更に、補足的にいえば、「東日小学生新聞」における「昭和の軍神」キャンペーンは、昭和十三年十二月二十一日(水・第七〇〇号)から始まったといえようか。この日、「昭和の軍神」西住大尉の見出しのもと、ほぼ第二面全紙を使った称揚記事と第三面に「西住小次郎大尉を偲ぶ」写真三葉が掲載された。

この掲載が、同年十二月十七日の陸軍から西住を「軍神」とするとの発表に連動するものであることはいうまでもなからう。そして、この後のキャンペーンに展開していったのであろう。

戦車第五大隊長西住中尉(死後、大尉)が徐州作戦で戦死したのは、同年五月十七日。「軍神」指定までには死後、凡そ半年。

戦時の「軍神」は、陸海軍の指導部が選出した神話の主役のよるな存在であって、これら「軍神」たちに勝るとも劣らぬ奮戦の果てに死んでいった勇士たちは、無限にといいてよいほどいたは

ずである。

しかし、全国民の戦意を高め、敵がい心をそそるためには、抽象的な「無敵日本軍」の固定観念を国民各層に植え付けるだけでは不十分とし、戦死者の名から特定の英雄を選定、神格化する必要がある、ということになったのであろう。

これほどの勇士が散華したのは、何という痛ましいことか。さあ、君たちも軍神に続け、という精神主義を定着させることも、戦時の啓蒙宣伝の一環であったに違いない。

このように「軍神」の背景を指摘したのは、秋山正美『小学生新聞に見る戦時下の子供たち』（第一巻、日本図書センター、一九九一・三）。軍部には戦争を継続するために「軍神」をつくる必要があったということである。

西住中尉の戦死は前述したように、昭和十三年五月十七日、徐州作戦においてであるが、生前、「東日小学生新聞」昭和十二年十一月二日（火・第三四六号）の「皇軍物語」に、次のように登場していた。

絵のやうな中尉の勇姿

二十七日の午後五時頃、西住中尉の一隊は、真如鎮攻撃の最中「もつと出ろ」と、敵中を突き破つて、堂々蘇州河畔まで出てしまつたが、両側の部落は、敵の放火のためどんどん燃えてゐる。それでもところどころには土囊を築いて盛にうつつくる。この時前方から外国人が四人避難してやつてくると、支那兵はパンパンと撃ち出した。「かうして自分で殺しておきなごら、日本軍がやつたと外国に宣伝するのだな」と思ったから「この野郎」とばかりに、中尉は右手に軍刀、左手に拳銃を握つて戦車から躍り出たので、その敵兵は慌てゝどこかへ隠れてしまつた。しかしこの時、蘇州河を背景に立つた西住中尉の姿は突に一幅の名画であつた。「戦争が済んだら俺が一つ描いて見る積りだ」と細見隊長は

語つた。

「戦車隊細見隊長」が「部下の勇ましさを語つたというものであるが、この「細見大佐がラヂオ放送「西住戦車長伝」と「東日小学生新聞」の記事になったのは、十三年十二月二十一日の「昭和の軍神」西住大尉」。放送は「二十五日午前十一時」、「あゝ、武人西住大尉」と題する講演と予告された。現場にいた上司であり責任者でもあつた「細見隊長」が軍神化キャンペーンに動員され、「細見隊長」を動員することで真实性を担保する目論見であつたのであろうか。

「部下の勇ましさを」を記者に語り、「戦争が済んだら俺が一つ描いて見る積りだ」と語つた細見隊長は、戦争が済むまでもなく、「部下の勇ましさを」を語ることにしたのである。

さて、「東日小学生」記者「渡辺善房先生」を講師とする「西住戦車長童話会」は、「軍神西住大尉を語る童話会」と題して、「群馬県桐生市東日販売店」主催で桐生市の小学校において一月二十六、七日に開かれたのを皮切りに、次のような日程で開催された。

- ・二月十日に「主催 東日小学生新聞」により東京豊島師範附属小学校で「軍神西住戦車長の童話」
- ・同月十六、七、八、二十日に「主催 東日小学生新聞、後援 新潟市教育会」により長岡や新潟で「昭和の軍神西住戦車長を語る童話会」
- ・四月十九、二十、二十一、二日に「主催 東日小学生新聞」により松本、長野、上田「軍神西住戦車長の童話会」
- ・六月と七月の二か月は北海道各地の小学校で「西住戦車長童話会」が「東日小学生新聞」の主催で開催された。

支那大陸で目ざましい活躍を続けてゐるあの軍馬の産地、有名な北海道で、私は二箇月間童話行脚をしました。

この二箇月間にお話をした学校は約三百校、十五万余名の児童の皆さんにお目にかゝった訳です。

「童話会」講師、「東小」童話班 渡辺善房による「北海道で拾った話（一）」（八月二十九日・火、第九一四号）の一節。「約三百校、十五万余名の児童」について確認していないが、「東日小学生新聞」における「予告」や「開催記事」では、六月に一六日間、七月に一九日間が予定されていた。一日の「童話会」は、殆どが午前、午後それぞれ一校の予定であり、釧路のように一日四校予定されたこともあった。

また、九月には、「講師 丸山義一先生」によって「樺太童話会」が四日間、「北海道童話会」が五日間行なわれるとの「予告」があるが、講演題目の記載はない。

なお、「講師 渡辺善房先生」による「愛国童話会」では「昭和の軍神西住戦車長と世界一周機ニッポン」の講演が九月に五日間、鎌倉・川崎ほか神奈川県各地で、同四日間、水戸ほか茨城県各地で「愛国童話会」の開催が予告されていた。

さて、「愛国童話会」と「軍神のお話」の二つは、共に、「西住戦車長童話会」を聞いた児童の作品であることは前述したが、「軍神のお話」は、次のような作品。

「軍神のお話」

此の間の日曜日、私たちは「軍神西住戦車長」のお話を聞きに学校へ行きました。疋田先生の御挨拶が終わると、背の高いデブプリ太つて眼鏡を掛けた渡辺先生が、ユツタリと壇の上に登られました。奉安所に丁寧におじぎをされてからこちらを向いた時、割れるやうな拍手が起りました。はじめの中は何だか聞きなれないお話振なのでへんでしたが、私は聞いてゐる中に段々引きずりこ

まれるやうな気持ちになりました。殊にたつた一台戻らぬ戦車を探しに出かけた戦車長のお話をきいた時は、眼がうるんで仕方がありませんでした。戦車長は足を撃たれて、今は靴をはくことが出来ませんでした。部下は気をきかして下駄を作つて差上げました。戦車長はその下駄を足に結んで居りました。ちやうどその日は雨がげしく降つておきました。その雨の中を竹の松葉杖をひきびつこをひきながら部下を探しに行つたのです。

日は段々暗くなつてきました。何時の間にか戦車長は敵の第一線近くまで来て居ました。戦車長は、低いが力のこもつた声で、「山根ツ：山根ツ：」と呼びながら一歩々々進んで行きました。

ふと立上がつてやみをすかして見ると、向かうに黒い影が見えました。戦車長は我を忘れて走り寄り、「山根ツ、生きて居たかッ。」と戦車の窓をたゞきました。山根伍長も戦車長を見て、戦車から江り落ちるやうにして降りて来ました。戦車長は、足の痛いのも忘れ松葉杖さへうつちやつて手をのばしました。二人は激しく抱き合つて泣きました。

私は、「なんて立派な戦車長だらう。自分の痛い足も忘れて、たつた一人の部下を探しにいったとは。」と思ひました。その事が私の心の底にこびりついたやうに感じました。私達の受持の奥村先生も腕を組んで聞いていらつしやいました。渡辺先生は、非常に上手でした。

「兵隊さん達は水が無いので、クリークの泥水でも飲むのですよ。」と言つて、テーブルの上に置いてあつた水をさもおいしさに飲んだりしました。聞きに来た人は、皆笑ひました。

私は西住戦車長のお話をきいて、全く感心しました。そして「かうした立派な軍人さんが、沢山いらつしやるので、日本は強いのだな。」とつくづく思ひました。

筆者は六年生。何とも立派な作品である。講演内容の詳しきはどの

ようにして生れたのであろうか。聞きながらメモを取ってでもいたのであろうか。投稿作品が編集の手を経て掲載されることがあるであろうことは想像に難くないところだ。勿論、この作品も同様だと断定するものではないが、筆者の年齢と内容の仕上がりには腑に落ちない点があることも拭い切れない。こうしてみると、この「綴方」作品自体が一種の軍神化キャンペーンではなかったかと考えたくなる。

ところで、「軍神」といえば、国語読本に「広瀬中佐」が取り上げられていた。

とどろくつつ音、

飛び来る弾丸。

荒波あらふ

デッキの上に、

やみを貫ぬく 中佐の叫び、

「杉野はいづこ、杉野はゐらずや。」

船内くまなく

たづぬる三たび、

呼べど答へず、

さがせど見えず。

船はしだいに 波間に沈み、

敵弾いよいよ あたりにしげし。

今はとポートに

移れる中佐、

飛び来る弾に

たちまち失せて、

旅順港外 うらみぞ深き、

軍神広瀬と その名残れど。

ここでも、「軍神」は部下思いである。勇敢さと部下を大切にする上

官像は「軍神西住大尉」にも強調されるところであり、「軍神」に求められた資質ということであったのであろうか。

さて、「東日小学生新聞」昭和十四年八月十日（木・第八九八号）には、次のような記事が掲載された。

第二の「西住戦車長」に

毎日たくさんの申し込み

少年戦車兵秋田県は百名を突破

空の少年航空兵と手柄を争ふ少年戦車兵を陸軍で募集してゐることは、皆さん知つてゐますね。全国各地とも沢山の志願者がありますが、秋田連隊区司令部へは五日までに百名以上の志願者があり、熱心な問ひ合せも毎日十二三人あります。締切の九月末までには二百名を突破するだらうと想像して、係の兵隊さんは感激してゐます。十月十二日から四日間体格と学科の試験があり、合格者は千葉の戦車学校で「第二の西住戦車長」としての猛訓練を受けます。又少年航空兵志願者も五十名あり、秋田少年の燃え上がる愛国心です。

陸軍が「陸軍戦車学校に於ける生徒教育に関する件」を公布し、満十五歳から十八の少年を対象に少年戦車兵の募集を始めたのは、この十四年七月十五日のことであった。「西住戦車長童話会」の児童が直接に少年戦車兵の候補でないことはいうまでもない。しかし、「西住戦車長」の軍神化キャンペーンの裾野にこうした児童たちが居たこともういまでもなからう。

次の作品は「兵隊さんへ」（埼玉県馬室校三年男子、七月二十三日）。

兵隊さん、たうゑが終わりましたら、こちらもきふにあつくなり

ました。せんちはとてもあつくなつたでせう。おからだを大じにして下さい。わるい水なんか飲まないで下さい。

朝の新ぶんを見ると、まんしうともうことの間で、今せんさうがはじまつて居るのださうですね。もう私の村でも、たくさんの人が兵隊に出てゐます。僕の兄さんも、僕の仲まの讃岐君の兄さんも出せいしました。

讃岐君はなか／＼元気です。僕も元気です。それで、二人は仲よしです。

慰問文の体裁をとっている作品。満州とモンゴル国境のノモンハンで、パトロール中の満州国軍とモンゴル軍が衝突、「ノモンハン事件」の発端となったのは、昭和十四年五月十一日であり、同三十一日に第一次戦闘が終り、七月二日に第二次の戦闘が開始。

六月二十七日、関東軍は中央の了解なしに独断でソ連領内のタムスクを爆撃した。

七月二日、地上兵力にも攻撃命令が出され、第二次の戦闘が開始された。しかし、日本側の損耗は大きく、とりわけ、八月二〇日からのソ連側の大攻勢で関東軍は壊滅的打撃を受けた。第六軍軍医部の調査では、日本軍の戦死七六九六六、戦傷八六四七人、生死不明一〇二一人を数えた。出動人員五万八九二五人に対する損耗率は戦病も含めると三二パーセントを超え、小松原師団にいたっては実に七九パーセントに達した。(講談社『昭和二万日の全記録』第五巻、平成元・一一)

「兵隊さんへ」の掲載は七月二十三日であった。掲載までの時間を推測すれば、第二次戦闘が行われていたころの作品か。出征した自分や友人の兄、村の人もたくさん出征したという。その出征先がノモンハンであるかは不明であるが、「兄」や村から出征した人々の消息は

もたらされなかった。

作品でいう「朝の新ぶん」がどの新聞のことか分からないが、「東日小学生新聞」における「ノモンハン事件」関係記事の見出しには次のようなものがあつた。

「満蒙国境に誉輝く 少年航空兵の勲

出勤まで悠々と相撲 沈着忽ちソ連機を撃墜」

(六月八日・木、第八四四号)

「あきれたソ連兵器 外見は新式、中味は旧式

ノモンハン事件の分取品で物笑ひ」

(六月十日・土、第八四六号)

「またも外蒙ソ連機 百五十機が越境

十八機で迎へ四十九機を撃墜 不時着の勇士徒歩で帰還」

(六月二十五日・日、第八五九号)

「ソ蒙機九十八機を撃墜 敵根拠地を空襲

地上の敵機三十を撃破」(六月二十九日・木、第八六二号)

「満蒙国境の大空中戦 敵機五十三機を撃墜

越境の大戦車軍を粉碎」(七月六日・木、第八六八号)

「繰返ソ蒙機の越境 又も四十機撃墜

最初からの合計九百二十四機」

(八月二十三日・水、第九〇九号)

また、八月二十四日(木・第九一〇号)には、次のような記事が第一面に掲載された。

満蒙国境空中戦

撃墜実機に千機の大記録

日満共同防衛軍のため度々撃退されてもこりず外蒙ソ連機は二十一日またも四回に亘つて越境して来ました。わが荒鷲はこれと壮烈な空中戦を交へて九十七機を確実に撃墜しました。第一回ノモンハン事件からこの日までの敵に与へた損害は合計一千百一機で不確実なものを合せれば一千二百十六機といふ世界記録をたてました。

「わが荒鷲」の圧倒的な勝利感を読者たる児童に与えたであろうことは想像に難くない。しかし、後に明らかになった事実は「八月二〇日からのソ連側の大攻勢で関東軍は壊滅的打撃を受けた」（『昭和二万日の全記録』第五巻、前出）であり、ノモンハン事件の停戦協定成立（九月十五日）後に陸軍省情報部から発表された「ノモンハン事件の終末」（内閣情報部編集「週報」第一五四号、昭和十四年九月二十七日）においても、「今次の戦闘は文字通りの激戦で敵に大打撃を与へたるは勿論であるが、我が軍亦山縣、森田、伊勢部隊長以下相当の死傷を出したのである。その詳細なる戦果に就いては目下調査中である」とされた。森田徹大佐（歩兵第七一連隊長）は八月二十六日に、山縣武光大佐（歩兵第六四連隊長）は八月二十九日にそれぞれ連隊旗を焼き自決、伊勢高秀大佐（野砲第一三連隊長）は八月二十九日に部隊全滅により戦死（三田真弘編『ノモンハンの死闘』、『昭和二万日の全記録』第五巻、前出）。

大敗を喫したノモンハン事件で、多くの将校が戦線離脱などの責任を追究されて、自決させられたり、また予備役に編入させられたりした。さらに、大敗の真相は国民の耳目から隠された。

（『昭和二万日の全記録』第五巻、前出）

戦時下に戦況の真相が国民に知らされるなどということは、戦略上ありえないといってしまうまでもであるが、その報道の結果、「胸躍る我が空軍の勇ましや九十八機の敵機落としぬ」（岩手県宮古校高二男子、八月五日・土、第八九四号）と読者は刷り込まれて行くことになる。「九十八機の敵機落としぬ」が「ソ蒙機九十八機を撃墜」の記事によることはいうまでもなからう。

「出征軍人」（横浜市神奈川校四年女子、九月八日）は、祖母に「クレパス」を買って貰って店を出た「日曜の伊勢ざき町」で目の当たりにした光景が内容。

日曜の伊勢ざき町はなか／＼にぎやかで、見知らない人がよいきものをきて、すましてとほつていく。と急に「みよとほかいのそらあけて」とにぎはしいがきこえ出した。だれかが「や出征軍人だ」といった。とほりがあるいてゐた人が、きふに立止まった。来る／＼大旗に「石井よしを」とかいたはたが、大きなたてものの中から、人のかほと一しよにあらはれた。手に手にみんななにかもつてゐるらしい。ちやうちんにらふさくがともつてゐる。小旗などがずぶぶんくる。とそのなかにめだつてあかいたすきをかけて白だすきを十文字にかけて、手に日の丸のあふぎをもつた出征軍人のあとから、これも同じ日の丸のあふぎをもつた見送りの人がづうつとづいてゐる。両側の見物人がばんざいとさけぶと行列の人は一せいにあふぎをふつた。ぱち／＼と、はれつ玉が、そこら中ではれつした。私はこはくてずうつとひつこんでゐた。大きなたてもの間からかほを出してゐた人々が、「ばあつ。」とあかあをしろのてゝぶをまいた。見しらぬ子どもたち、「やあてゝぶがおちてきたぞ、ひろつちまへ。」とてゝぶのおちた方へかけていつた。もう見おくり人のせんとうは松屋ちか

くにいつてゐる。

「出征軍人」のための壮行会が行われ、最寄りの駅まで見送りの行列に遭遇したものであろう。「がくたい」による「愛国行進曲」に乗って行列がやってくる。出征者の氏名を大書した幟をたて、手に提灯を持ち、日の丸の小旗を振りながらやってくる。行列を迎えた道の両側の人々は、時折、万歳を叫ぶ。「はれつ玉」がパチパチと弾ける。「私はこはくて」しかたなかったが、子供たちは赤青白の紙テープをつかみに走って行った。「伊勢ざき町」は、「出征軍人」の関係者のみならず、その場に居合わせたいわば他人を巻き込んで盛り上がりつつあった。「出征」の見送りは、あたかもお祭りのようである。

誠に、賑やかな出征風景であるが、前稿で触れたように、第二四半期には、対象的な「伊勢ざき町」があった。

いつの日曜だったか、伊勢ぶらをしてゐたら松屋の方からかなしい音楽が聞えて来た。いつのまにかお巡りさんが「南支からあこつが帰りましたから、号令と共に礼をして下さい。」今まではちの巣をついたやうにさわがしかつた大通も、真夜中のしづけさとなつた。号令がかゝつた。

「礼。」皆は自ら頭がさがつた。かなしい音楽と共に小さい女の子が、首から白い紐をさげて小さい箱をぶらさげていく。(略)

「英霊」(横浜市大岡校五年男子、五月十七日)の一節である。賑やかな「がくたい」に送られる「出征軍人」、「かなしい音楽」に迎えられる「小さい箱」。「見しらない人がよいきものをきて、すましてとほつていく」日曜日の「伊勢ざき町」。ひと時の歓楽の場に「出征」と「ゐこつ迎え」が忽然と立ち現われる。平穏な日常生活に「戦場」が不意に姿をあらわにする。まさしく「戦時下」なのである。

「連隊生活」(横須賀市鶴久保校四年女子、九月十五日)は、「朝早

くから連隊へ行きますので、朝二時頃おべんたうをつめていただき、家をでました」との一文ではじまる。三時頃学校を出たのは、兵隊の五時の起床から洗面、点呼、勅諭の奉読など、一連の朝の業務を見学するため。様々な兵舎での活動を見学し、「学校へついたのは、八時ごろ」。

戦時下という時局が予告なしに児童を巻き込んだ作品が「出征軍人」であり「英霊」であったが、この「連隊生活」が描いているのは、児童の日常生活に意図的に割り込んできた戦時下であった。寝ている兵隊を見るために、児童は寝られなかった。社会見学というにはあまりに苛酷であったと言わざるを得ない。

強いられた時局を如実に示したのは、「興亜奉公日の朝」(八王子市第四校六年男子、九月二十六日)。

「カチ、カチ、カチ。」時計の音だけがさびしい。時々犬の遠吠えが聞える。時計を見ると、五時半に近い。もうさいれんが鳴る頃だ、と思ひついた時、待ちにまつてゐたサイレンが、張切つた第一声をはなつた。続いて所々のサイレンも鳴りひびいた。皆は床をけつて飛起きた。兄さんが、「なんだもう秀ばう起きてゐたのか、今朝は負けた。」と言つた。おかげで僕は、鼻が、高い。おかげでお母さんが御飯をたいて居る。時々煙が僕達の顔をあらふ。庭へ出て門に国旗をかかげた。僕等の旗が一番立派だ。旗が風にあふられてはたはたとなる。六時になると又鳴つた。家中総出で宮城えう拜をした。朝食にはこげた御飯となすのおかうことまめづけで戦地をしのんだ。

「興亜奉公日」が制定され、「東日小学生新聞」に掲載されたのは、八月十日(木・第八九八号)。

毎月一日を興亜奉公日に

戦場の勇士の身の上を偲び、日本精神をしつかりと国民の心の中に植ゑつけるため、荒木文相の案で、興亜記念日が八日決定しました。毎月一日をその日と決定、九月から早おき、身なりを質素にすること、むだづかひをしないことなどに一層つとめます。

「今日は初の『興亜奉公日』心して過せ意義深い一日」の見出しのもと、「この日に国民がつとめなければならぬ事」が、九月一日（金・第九一七号）に掲載された。

△早起きをする事。

△護国の英霊に感謝、勇士の墓地の清掃を行ふ。

△前線に慰問文や慰問袋を送り、銃後では、傷痍軍人を見舞ひ、出征軍人遺家族の慰問を行ふこと。

△体位向上のため大いに歩くこと。

△特に心をひきしめて働くこと。

△服装や食事は質素にすること。

△無駄づかひをしないで、儉約したお金はきつと貯金すること。

作品での、早起き、「宮城えう拜」、「朝食にはこげた御飯となすのおかうことまめづけ」は、「国民がつとめなければならぬ事」であった。「こげた御飯」は偶々、こげたのではない。戦場にいる「勇士」の労苦を偲んで、わざわざ「こげた御飯」を炊き、「質素」を体現するところが求められたということであろう。

「興亜奉公日」は、「毎月一日」とされたが、これを機に、遊興をはじめ生活全般に制限を加えられることになった。食生活では一汁一菜、服装身だしなみでは女性のパーマネットと男子学生の長髪が禁止され、中元・歳暮の贈答廃止などが求められた。

こうした規制は、「内閣告諭号外」における一節「毎月一日ヲ以テ興

亜奉公日ト定メ之ヲ恒久実践ノ源泉タラシムル」がその根拠となった。「興亜奉公日の実践事項、これは何もその日一日だけやればそれでよいという訳のものではありません。これを以て恒久実践の源泉たらしめねばならないのであります」とされた（週報）第一四八号、昭和十四年八月十六日。「興亜奉公日」は、「国民精神総動員」運動の新展開であり、日常生活の戦時態勢化を目的とするものであったといえよう。

「子兎の死」（北海道月浦校六年女子、九月十日）は、「軍用兎」にするつもりで飼育していた兎が猫にとられてしまったという作品。いわゆる「兎報国」については、これまでに見えていたが、この第三四半期においても、「兎の村を目ざす 大野村校の意気こみ」（七月十九日・水、第八七九号）や「殖そ太らそ僕等の友達 兎報国の糸魚川校」（八月十五日・火、第九〇二号）などの記事が掲載されていた。

以上、「綴方」について、内容に「戦時下」色に見える八作品を検討してきた。この第三四半期に掲載された「綴方」は七八作品であり、その他の児童の日常生活にある身辺での出来事と内容とする作品の方が圧倒的に多い。しかし、この八作品には、投稿した児童の肉親の戦死などは描かれなかったものの、学校でも家庭でも街頭でも、生活や心情の「戦時化」が推し進められて行く児童の様子が作品から伝わってくるのである。

三 昭和十四年第三四半期における「詩」「短歌」「俳句」

「詩」の作品掲載数は、八〇作品。第一四半期が九五、第二四半期が九〇作品であり、十四年度では最も掲載数が少ない。しかし、計算上は、第三四半期でも毎日一作品が掲載されたことになる。

掲載された八〇作品のうち、作品内容に、戦時下色に見えるのは次の五作品。因みに、第一四半期では一五作品であり、第二四半期では四作品であった。

掲載された「詩」作品五篇のうち、内容上、戦時下色が濃いものは、次の二篇。

「凱旋兵士」

(沼津市第四校高二男子、七月二十五日・火、第八八四号)

「去年の今日」

(船橋市八栄校六年女子、七月二十九日・土、第八八八号)

戦時下故の字句がみられたのは、次の三作品。

「すり白びき」

(福島県波川校高一女子、七月四日・火、第八六六号)

「ランドセル」

(北海道幌成校四年女子、八月四日・金、第八九三号)

「勤勞奉仕」

(秋田県川口校高二男子、九月十九日・火、第九三二号)

「凱旋兵士」(沼津市第四校高二男子、七月二十五日)は、次のような作品。

駅に凱旋兵士の乗った列車が止つている。

どの兵士を見ても

北側の窓から首を出して、

富士山の方を眺めてゐる。

中には顔中ひげだらけの、

鬼兵隊さんも居る。

住所を聞くと富山ださうだ。

「去年の今日」(船橋市八栄校六年女子、七月二十九日)は、次のような作品。

去年の今日だつたよ

久しぶりの兄さんがいせんした日だよ

「死ぬか生きるか」の戦場から

久しぶりに凱旋した日だよ。

帰つて来た時は、

自然に涙が落ちて来た。

第三四半期における戦時下色の濃い詩作品の二つは、共に帰還を内容としていた。作品における時制は、「凱旋兵士」はおそらく現在であり、「去年の今日」は題名のように「去年」ではあるが。この第三四半期の「綴方」作品には「出征軍人」があった。戦場に出ていく兵隊と帰ってくる兵隊とがいるということであり、これらの作品の背景には、この当時の戦況があったということであろう。戦地へ投入される一方であった戦況から前線と内地との戦力の交替を可能とする戦況となったということか。

戦時下故の字句が作品にみえる「すり白びき」(福島県波川校高一女子、七月四日)は、石臼で精米している兄に、「発動機でやつたらいよべ」といったら、兄は「今非常時だからな」と石臼を廻し続けたという内容の作品であり、「ランドセル」(北海道幌成校四年女子、八月四日)は、「今では古くなつたランドセル、けれど資源愛護よ、もつと／＼大事に」使おうよという作品。

「非常時」や「資源愛護」といった戦時下での心構えが児童の日常生活の規範として要請されていたということである。

「勤勞奉仕」(秋田県川口校高二男子、九月十九日)は、次のような作品。

空はコバルト日本晴

僕等の心も日本晴、

勤勞奉仕だ愉快だな

空の太陽も笑つてゐる。

草はぼう／＼はえてゐる。

僕等の腕で此の草を

皆刈取るんだ愉快だな、

握つた鎌も光つてゐる

汗は流れる日は暑い

なんのこれしき勇んでさ、

力を出してがんばろよ、

日本男子だがんばろよ。

見渡す限り草もなく

僕等の腕で草もなく

広い大地が笑つてゐる

空の太陽も笑つてゐる

草刈りの「勤勞奉仕」。別稿「戦時下における児童の夏休み」（昭和文学）第三八集、平成十一・三で検討したように、この夏、児童には、神社清掃の奉仕作業、出征軍人家族への援農、道路の除草、校庭の整備、軍馬の飼葉作り等々、様々な「勤勞奉仕」が求められた。

別稿でも紹介しておいたが、この年第三四半期の七月二十一日（金・第八八号）の「東日小学生新聞」第二面には、次のような記事が掲載された。

一学期を終へて

「夏の鍛錬」へ

一学期が終わりました。今日から夏の鍛錬日ですね。去年までは暑中休といつてをりましたが、非常時の折から、遊んでばかりいたり、寝ころんでばかりはられません。戦地の兵隊さんのことを思ひ、皆さんもやがては国防の第一線に立たなければならぬ大切な身体ですから、この四十日間にみっちり鍛へて、お役に立

つやうにと、暑中休を夏の鍛錬日と改めました。全国どの小学校でも、この四十日間に勤勞奉仕や水泳やラヂオ体操、遊戯をして、大いに体位向上をはかることになりました。皆さん、しっかりとやませう。

去年までの夏休み、すなわち暑中休暇は、この夏、体位向上のため「鍛錬日」に改められてしまった。鍛錬の目的は、小学生の「やがては国防の第一線に立たなければならぬ大切な身体」の体位向上にあるという。それほどの長期戦を想定していたのであろうか。

「勤勞奉仕」が、「水泳やラヂオ体操」同様「体位向上をはかる」手立てにされた訳である。しかし、「勤勞奉仕」によって身体を鍛えて、「お役に立つ」ように体位向上を図るといふ長期の展望があったにしても、短期的あるいは差し迫った対症療法としての「勤勞奉仕」は、大量且つ長期にわたる兵役による労働力不足への対応であつたらう。つまり、「体位向上」を名目とする軽労働の児童への割り振りが眼目ではなかつたか。

皆と一しよに草刈りだ、

草を刈るたびがり／＼。

かまは、いなづまのやうに、

ぴかりと光る。

をはつた時は、もう夜だ。

ごはんをたべてねる時は、

草をいくらかつたかといふ話。

「草かり」（宮城県浅水校五年男子、九月二十四日・日、第九三七号）という作品。この作品も、内容的には「勤勞奉仕」とするべき作品であるが、字句に「勤勞奉仕」がみえないために、戦時下色がみえる作品には数えないでおいた。

“昔の”子供は良く家の手伝いをしたものだといわれる。第三四半期にも次のような作品がある。

プチ、プチ

桑を摘む音気持よち

空はどんより曇ってる。

緑色がしたたりさうな桑の葉

桑を摘む手先から

桑の匂ひがする。

カツコウをききながら、

プチ／＼桑を

摘むのはうれしい。

「桑摘み」(福島県波川校高一女子、七月十三日・木、第八七四号)という作品。プチプチとリズムミカルに桑を摘み取っていく様子はこの作業に慣れているからだろう。桑つみをもう何度も経験しているようだ。摘み取られる桑の匂いを感じさせる作品だ。

次の作品は、「乳しぼり」(長野県洗馬校四年男子、八月二十七日・日、第九一三号)。

朝起きたら、

「乳をしぼつてこいよ。」

とお父さんがいふ。

乳房をにぎると、

山羊があばれた。

ぶつと逃げた。

つかまへてきて、

またぶつた。

もうあばれなんだ。

乳がびんの中で、

ちゅう／＼と鳴つた。

おれは笑つた。

乳絞りは少年の朝の仕事なのだろうか。寝起きから少年の力加減が狂ったか。それとも、いつもの山羊と少年の駆け引きか。山羊の乳でびんが温かくなる。そんな温もりが感じられる作品だ。

児童には、こうした家の手伝いを日課としながら、「勤労奉仕」も要請された。「勤労奉仕」は「奉仕」であっても、断る訳にはいかないのだから実質的には強制と云ってよからう。

勤労奉仕、集団作業の重視、戦時に於ける生産力拡充計画・経済統制等に関する理解を深からしむ。

この一文は、新潟県南蒲原郡今町小学校高等科第二学年第十六学級における昭和十四年度「学級経営案」の「実業」科目における「国民精神総動員実施計画」トノ連絡及実施事項」の欄に担当教諭の手で書き込まれた教育目標である。

「勤労奉仕、集団作業の重視」は、「国民精神総動員実施計画」に沿った「学級経営」の「努力事項」であり、「生産力拡充計画」の一環であったということであろう。つまり、児童は働き手として期待され、労働階層の低年齢化が企図されたといえようか。

なお、この「学級経営案」からは、小学校教育が「国民精神総動員実施計画」に組み込まれ、「国民精神総動員実施計画」の実践が小学校教育に期待されたということがあきらかである。

「短歌」を検討する。

「短歌」の作品掲載数は、二九首。第一四半期が三九、第二四半期

が四〇首であり、「詩」作品同様、十四年度では最も掲載数が少ない。掲載された二九首のうち、作品内容に、戦時下色の見えるのは次の八作品。因みに、第一四半期では一〇首であり、第二四半期では二二首であった。

ぬかるみに苦しむ馬車の様見れば輜重兵の苦勞しのぼる

(神奈川県茅ヶ崎第三校高二男子、七月二十六日・水、第八八五号)

胸躍る我が空軍の勇ましや九十八機の敵機落としぬ

(岩手県宮古校高二男子、八月六日・日、第八九五号)

見送りの国に報ゆる一つぞと力をこめて握る旗かな

(神奈川県茅ヶ崎第三校高二男子、同右)

兵隊さんしつかりやつて下さいと今朝も祈りぬ戦地の空を

(山梨県鵜沢校高一女子、八月八日・火、第八九六号)

千代八千代栄える御代と勇士等の武運祈りて一人鶴折る

(埼玉県第一蕨校高二女子、同右)

あめつちの仇と戦ひかへりけるみたまやすかれ靖国の神

(川崎市中原校六年男子、九月五日・火、第九二〇号)

ますらを護国の神となりましてねむりあませる

(北海道苫小牧西校高二女子、九月十三日・水、第九二七号)

兄さんの出征を祝ふ旗の波稲荷神社の前にひらめく

(茨城県若松東校六年女子、九月十六日・土、第九三〇号)

第一首「ぬかるみに」の作品は、目の前のぬかるみの道にはまって難渋している馬車の様子が「輜重兵の苦勞」に重なったというもの。「輜重兵の苦勞」はニュース映画でも見たか。

第二首「胸躍る」は、「綴方」で触れたように、ノモンハン事件に關

する「東日小学生新聞」六月二十九日(木・第八六二号)の記事「ソ

蒙機九十八機を撃墜」によるものであろう。

第三首「見送りの」の作者は、第一首と同じ「神奈川県茅ヶ崎第三

校高二」。同校同学年生による「短歌」が第二四半期に四首掲載されているが、「見送りの」の作者はその一人。「見送りの」に報ゆる一つぞ」は担任或は出征見送りの指導者の口振りを連想させよう。

第四首「兵隊さん」と第五首「千代八千代」は、兵隊の武運長久を祈るもの。戦時下としては、いわばおなじみのもの。

第六首「あめつちの」と第七首「ますらを」は、戦死者を「靖国の神」「護国の神」とするもの。

「短歌」において、戦死者を「護国の神」「靖国の神」と表現したのは、昭和十三年十月四日(第六三三号)に掲載された神奈川県北足柄

校高二の二人の作品。第六首の作者は神奈川県川崎市、第七首は北海道苫小牧市。用語の広がりや云々するのは軽率か。なお、俳句で「靖

国の御霊」と使われたのは十四年三月八日(第七六五号)に掲載作品。因みに、作者は宮城県仙台市の六年生。

第八首「兄さんの」は、「戦時下」が身内に及んでいる作品。第二四半期には「大陸で花と散つたわが兄よ遺骨となつて今日凱旋す」(六月十五日・木、第八五〇号)の作品が掲載されていた。第八首「兄さ

んの」の作者もこの作品を読んでいたであろうか。

「俳句」を検討する。

「俳句」の作品掲載数は、七一句。第一四半期が八八句、第二四半期が九四句であり、「詩」「短歌」作品同様、十四年度では最も掲載数が少ない。

掲載された七一句のうち、作品内容に、戦時下色の見えるのは次の六作品。因みに、第一四半期では八八句のうち一一句であり、第二四半期では九四句のうち七句であった。

旗の波今日も窓から見えにけり

(岩手県広田校高一男子、七月四日・火、第八六六号)

慰問品兄の姿が目に見えにけり

(岩手県広田校高一男子、七月四日・火、第八六六号)

慰問品兄の姿が目に見えにけり

(岩手県広田校高一男子、七月四日・火、第八六六号)

(北海道沼田校高二男子、七月二十七日・木、第八八六号)
見送りにうづまるやうな出征兵

(群馬県万場校高二男子、同右)

兄さんと肩をたゞげば他の兵士
がいせん兵をしいと思ふ顔のひげ

(山梨県穂坂校五年男子、八月六日・日、第八九五号)
(長野県大桑校四年女子、八月十一日・金、第八九九号)
夕月をながめて中文の父思ふ

(新潟県新津校高二男子、九月二十六日・火、第九三八号)

第一句「旗の波」と第三句「見送りに」は、出征兵士の見送り風景。「見送りにうづまるやうな出征兵」では、作者も「見送り」の一人か。「うづまるやうな」に臨場感がある。

第二句「慰問品」と第六句「ゆう月を」は、共に肉親を戦場に送っている児童の作品。「慰問品」の作品は、「綴方」の「あもん袋」にあつたように、戦地への「あもん袋」に入れる数々を揃えている際の句か。「綴方」の「あもん袋」と違い、「慰問品」の向こうには「兄の姿」があり、切実だ。

第六句「夕月を」は「中文」に出征している父もこの夕月を眺めることだろうとの作品であろうが、夕月を介して父に繋がる思いはどのようなことであろうか。

第四句「兄さんと」は、戦地からの帰還とは必ずしも断定できないが、出迎えの人込みの中で、見覚えのある背中を見つけたのであろう。嬉しさを肩を叩いたが「他の兵士」だった。後ろ姿が兄に似ていたことから肩を叩いたのだが、違ってしまった。自分の記憶にある兄ではなかったということか。兄との再会が久しぶりだということなのだろうか。

第五句「がいせん兵」も、帰還兵の出迎えでの感想。ひげを剃る暇もなく帰還した兵士の顔形への素直な思いであろうが、作者には「顔

のひげ」がうっとうしく映ったのであろうか。

これら六作品の背景にあるものは、出征——戦地——帰還。兵士の一連のステージがここにある。

四 昭和十四年第三四半期における「書方」〔図画〕とこの期の概括

「書方」を検討する。

「書方」の作品掲載数は、三〇〇点。第一四半期が二二二点、第二四半期が二二一点であり、十四年度では最も掲載数が多い。

ところで、前稿において、「書方」作品について、次のように記しておいた。

字句において、時局的なものは、第一四半期には「満洲帝國萬歳」の一作品があつたが、第二四半期では、強いて挙げれば「天皇旗最敬礼」の一作品のみ。

以下、その後の調査、整理の結果により、訂正して補足しておきたい。

第一四半期での時局的な字句には、「満洲帝國萬歳」のほか、「皇紀二千六百年春如海萬象更新」「東亞一新の春」「大内山松の緑」「仰げ日の丸」「防火防空」「戦争軍旗大砲」「強い軍人」なども入れるべきであろう。この内、「大内山松の緑」は皇居のことであり、時代を反映しての字句と考えるべきで七点あり、「戦争軍旗大砲」も二点ある。その他の字句もやはり時局に関連のあるものは、総計で一五点と考えておきたい。

また、第二四半期では、「大内山松の緑」「銃後國民協力一致」「戦争軍旗大砲」「天皇旗最敬礼」などがある。この内、「天皇旗最敬礼」は四点、「大内山松の緑」が二点あり、総計で八点。

では、第三四半期の掲載作品三〇〇点には、どのような時局を反映

した字句がみられるかといえ、**「感謝で守れ」「軍神西住戦車長」「興亞奉公日」「さあ戦ひはこれからだ」「征空ニツポン」「戦場にある将兵の苦勞を偲べ」「大東洋建設」「培國本養國力」「躍進日本興亞の光」**などがある。この内「**軍神西住戦車長**」が三点、「**躍進日本興亞の光**」が二点で、総計で一・二点。

第三四半期での特徴は、このような多様な標語的字句がみられることである。

新潟県南蒲原郡今町小学校高等科第二学年第十六学級における昭和十四年度「**学級経営案**」の「**書方**」科目における「**国民精神総動員実施計画トノ連絡及実施事項**」の欄には、担当教諭の手で次のように書き込まれていた。

筆、墨、紙等の節約

特に練習時に於ては白紙を用ひず、新聞紙その他を代用する。

時局に関連した文字の練習、展覧。

また、「**綴方**」科目の「**国民精神総動員実施計画トノ連絡及実施事項**」の欄には、「**国民精神総動員計画に基づく標語作製**」と記されていた。

第三四半期にみえる標語的字句の作品には、このような小学校での教育活動の展開としての背景があつたのであろうか。

「**軍神西住戦車長**」の三点はすべて北海道幾春別校六年三人の作品であり、「**綴方**」の「**軍神のお話**」がやはり同校六年生の作品であつたことは前述したところである。軍神化キャンペーンが「**書方**」にも現われたということであろう。

字句の種類は一〇〇を超えるが、同字句での作品のうち、五点あるのは、二年生の「**雨ガフリ出ス**」と「**ムシハネ**」、三年生の「**あひる二三羽**」と「**深い谷松かぜ**」、四年生の「**黒雲雷雨稲光**」。

六点は六年生「**法隆寺五重塔**」と高一「**仰觀山俯聽泉**」。

七点は五年生の「**高野山佛法僧**」と「**飛行機航空路**」、六年生の「**地平線入道雲**」と「**歴代神靈加護**」。

八点には、六年生「**原始林神秘境**」があり、九点には四年生の「**野川えび目高**」と高一の「**空夜窓閑深更軒白**」。

高二には、「**顕微鏡細菌繁殖腐敗物**」が五点と「**顕微鏡腐敗物**」が五点あり、合計すると一〇点となる。

一四点もあるのは、五年生の「**苗代田蛙鳴く**」であり、六年生の「**少年よ大志を抱け**」は一五点で最も多かった。

なお、東京日日新聞社の社有で純国産機の「**ニッポン**」の世界一周への出発（八月二十六日）を記念して募集された懸賞「**図画と書方ニツポン紙上作品展**」の入選発表（八月二十日）には、一・二年生による「**ニッポン**」が一四点掲載された。

第三四半期における「**書方**」の特徴は、多様な標語的字句がみられることであろう。また、「**軍神西住戦車長**」の三点はすべて北海道幾春別校六年三人の作品であり、「**綴方**」の「**軍神のお話**」がやはり同校六年生の作品であつたことは前述したところである。同校における「**軍神化キャンペーン**」への対応が「**書方**」にも現われたということであろう。

「**図画**」を検討する。

「**図画**」の作品掲載数は、一〇〇点。第一四半期が八二点、第二四半期が六九点であり、「**書方**」同様、十四年度では最も掲載数が多い。

この一〇〇点の作品において図柄に時局を思わせるものは、四点。因みに、第一四半期では六点、第二四半期では五点であった。

第三四半期における四点の図柄は、人物画に兵隊を描いた作品、戦闘中と思われる飛行機の絵柄が一点、同じく戦闘中の飛行艇を図柄とする作品が一点、兵士に駆け寄る子供を描いた作品が一点。

図柄は、静物画では、野菜や果物を題材とした作品が七点、水差しや土瓶、湯呑み茶碗、鍋、玉しゃくしなどの生活用品を描いたものが

九点、鉢植えの朝顔や花などを描いたもの四点、その他に、紙風船、こけし、パナマ帽子、張り子の猫などをそれぞれ描いた作品が一点ずつ。

静物画以外では、立ち木を添えた家や林を描いたスケッチ風作品が多くみられるが、その他では、農作業風景や乳母車、学校、自動車、電車、汽車、汽船、煙突、にわとりなどが、それぞれ描かれた。

また、少女像や蛭狩りの光景、花に水遣りをしている少女、蟬取りの子供たち、家族団欒の様子などを描いた作品もみえる。

いわゆる風景画では、山と家、立木の描かれた作品が多いが、鉄橋と川舟、浜辺、なども描かれた。

なお、「書方」同様、東京日日新聞社の社有機「ニッポン」の世界一周を記念して募集された懸賞「図画と書方ニッポン紙上作品展」の入選発表として「ニッポン」号を図柄とした一一作品が掲載された。

第三四半期も、第一、第二四半期同様、多くは児童の生活風景にある図柄であり、「戦時下」故の作品は多くはなかったといえよう。

以上、昭和十四年（一九三九）第三四半期の、七、八、九月の「児童文化」について、その位相と展開を検討してきた。

第三四半期の展開を概括すれば、内容等において「戦時下」という時局を反映した作品は、次のような掲載状況であった。

「綴方」では、七八作品のうち、九作品。

「詩」では、八〇作品のうち、五作品。

「短歌」では、二八作品のうち、八作品。

「俳句」では、七一句のうち、六作品。

「書方」では、三〇〇作品のうち、一二作品。

「図画」では、一〇〇〇作品のうち四作品。

掲載された作品数からは、「戦時下」を内容とする作品の掲載は多くはなかった。

また、これら「戦時下」という時局を内容にもつ作品にあっても、

「綴方」「詩」「短歌」「俳句」のそれぞれのジャンルにおいて、投稿した児童の肉親や身近な者の負傷や戦死など、いわば切実な「戦時下」は描かれなかった。

ところで、「東日小学生新聞」に掲載された「戦時下における児童文化」についての検討は、本稿で「その七」となり、これまでの検討を踏まえて「戦時下」という時局を内容とする掲載作品について概括してみると、投稿児童にとって身近な人間の入営が作品に見えるのは第二五五号（昭和十二年第三四半期、七月十八日）からであった。

入営し出征した身内の兄や「友の父」の戦場での負傷が作品に見えるのは、第四四六号（昭和十三年第一四半期、二月二十七日号）から。

作品中に初めて「戦死」が現われたのは、「戦死した父に手向けん桜」の第四九四号（十三年第二四半期、四月二十四日）。

身内ではないが、戦没兵士の遺骨帰還を出迎える「英霊迎へ」は、第五二八号（十三年第二四半期、六月三日）。

「お父さんが名譽の戦死をしたらもう、五ヵ月もたちました」という「綴方」が掲載されたのは、第六一五号（十三年第三四半期、九月十三日）。翌日の第六一六号（九月十四日）には、「幼い子父の遺骨に旗をふる」の「俳句」が掲載されていた。

昭和十四年、第二四半期には、「大陸で花と散ったわが兄よ遺骨となりて今日凱旋す」という「短歌」があったが、今回検討してきて第三四半期には、既に述べたように、投稿児童の肉親の負傷、戦死などは描かれていなかった。

この十四年第三四半期においては、「戦時下色の濃い」詩作品の二つが、共に帰還を内容とするのは、やはりこの時期の戦況を背景とするものであろうか。

一方、「綴方」に「出征兵士」に見られるように、戦場から帰ってくる兵隊がいれば、戦場に刈り出される兵隊がいるということである。

このことは、出征——戦地——帰還と兵士の一連のステージが見えた

「俳句」作品に象徴的であった。

この第三四半期、児童を取り巻く戦時下の状況は、比較的平穏に推移し、そうした状況が投稿作品にも反映したといえそうである。しかし、この第三四半期における「ノモンハン事件」の真相を、国民は今だ知らされていなかった。

こうした、隠蔽された平穏さのなかで、児童の日常生活においては、学校でも家庭でも街頭でも、生活や心情の「戦時化」が推し進められて行った。夏休みは「暑中休」ではなく心身の「鍛錬」に充てられ、「興亜奉公日」の実践項目は「恒久実践ノ源泉タラシムル」ところとなった。「戦時下」にあつて、一層の「戦時化」を児童に要求する時局の到来であつたといえようか。(二〇〇一・一一・二七)

△付記▽本稿の一部は、「戦時下における児童文化について―『東日小学生新聞』の昭和14年第3四半期における読者投稿作品をめぐって―」と題して、大妻女子大学国文学会第65回例会(二〇〇一・七・七)で口頭発表し、その質疑の中で、須田喜代次氏から「軍神のお話」の内容と「広瀬中佐」との親近性について教示を得た。記して謝したい。